

プロへの道

小佐 美智子

私が、大阪工業英語研究会へ仲間の5人と共に入会させて貰ったのは1984年、もう10年も昔のことである。当時私達は、別に翻訳士会の講座で水上先生に工業英語の初歩を習っていた。そもそも工業英語なる勉強を始めてまだ2年位しか経っていない時だった。だから、入会当時、この6人共まだ大した翻訳もできていなかったと思う。

そんな時、いきなりプロが大半を占めるという工業英語研究会に入会させて貰うことになり、私は内心少なからず、びくびくしていた。入会してみると、さすが実戦でたたき上げて来られたのであろう皆様は実に見事な翻訳を披露して私達に良い手本を示して下さっていた。私はなるほどと感心したり、時には、そういう事だったのかと疑問が解けて納得したりするのみであった。

会員の構成は、約8対2の割合で、男性が圧倒的に多かったが、皆さん方は紳士的で温和な方ばかりで、私は人知れず、ほっと安堵の胸をなぜおろしたものだ。そして、このような会の会員になれたことに誇りを抱きはじめていた。この雰囲気はきっと、創立者と聞き及んでいる、今は亡き徳永さんを始め、草創期の方々のお人柄に負うところ大きかったに違いない。

毎月一回の講座はとても興味深いものであったけれど、それまでの15年間、外資系貿易商社勤務の経験しかない私には、工業の実際の内容が判らずに困ることが多か

ったのも事実である。しかし会は、いろいろな専門分野を持つ方々で構成されていたので、先生の選ばれる幅広い題材の翻訳に、それぞれ専門の知識を持った方が必ず数人はおられ、その方面の説明をしてくださった。だから私達は、英語の表現とともに、工業の各分野の内容まで教えて頂けたわけである。とはいえ講座はいつも固い工業ばかりでなく、時には文学、またある時には、商業に関するものと実に変化に富んでいた。今でも忘れられないのは、古文で書かれた山の中の間歇泉に関する一文である。

「この山の一つの峽(オ)、崩(ク)え落ちて いかれる湯の泉 処々より出でき。湯の気はさかりて熱く、飯(イイ)を炊(カ)ぐに早く熟(ナ)れり。

水の色は紺の如く、常は流れず、人の声を聞けば、驚き、いかりて、泥土(ヒジ)を騰(ア)ぐること一丈ばかりなり。今、いかり湯というは是なり。」

こんな文章を英語に直すことに非常に興味を覚えた私は、前へ出て行って、黒板に自分の翻訳を書かせて貰った事を記憶している。これは、いわば、ON THE SPOTなので、それほど良く出来たとは思っていない。(でも、先生に少しばかりほめて頂いたように思う)

この外、誰か外人の訳だけれど、との前置きで、俳句の英訳を紹介して下さい

ともある。それは、芭蕉の「古池や かわ
ず飛び込む 水の音」で、私の記憶違いで
なければ、

In an old pond
a frog jumps into the pond
Splash! And silence again

というものであった。すっかり感心した私
は帰宅すると、早速これにならって、2、
3の有名な俳句を英訳してみた。どんな風
になったのか、殆ど忘れてしまったが、よ
くよく思い出してみると、例えば蕪村の次
のような句である。

春の海 ひねもすのたり のたりかな

Spring sea waves,
How lazily you roll over
All through the day

このように月に一回の楽しい講座を私は今
までに幾回受けたことだろう。(私には、途
中で数年間のブランクがある)そして、気
がついたら、私も翻訳の仕事に携わり、そ
れによって報酬を得ていた。

行き詰まると私は何時も講座のノートを
広げて、参考になる個所を探す。また、先
生や会員の方々の色々な助言やヒントが心
の耳に聞こえてくる。それを聞いた時点で
は何の事か判らなかつた事が、実際の仕事
で直面してみると、にわかには目の前に光が
さすように、はっきりと判ってくる。これ
は、水上先生の選ばれる題材が、現場で使
用されているのと同じものであるからに他
ならない。だからどんな仕事ができても、

「経験がないので」等と言って断ることは
ない。実際に仕事で自分が翻訳していなく
ても、研究会で疑似体験をしているから、
これは非常に強力なデータベースを体内に
持っているのと同じである。

いろいろな翻訳の講座があると聞き及ん
でいるが、是ほど、純粋に翻訳を追求し、
会員同士が仲良く、新人には努力を惜しま
ず教えて下さる教育機関が他にあるとは思
えない。この会が、工業英語翻訳を目指す
人達に対してかなり大きな貢献をしている
と思う。これはこの、大阪工業英語研究会
の一つの大きな特色でもある。

思えば、翻訳を最初に志したとき、工業
英語を選んでよかったと思っている。そし
て、この大阪工業英語研究会とめぐり会
えてよかったとつくづく思う。今後もずっと、
通い続けることだろう。休んだりして、同
期の人達にも随分と後れをとったけど、や
っぱり、皆さんについていこう、私はいつ
もこう思っている。